様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６３４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ０１５７０

研究課題名（和文）18世紀末ブリテンにおける女性論の諸相：功利主義的フェミニズムの可能性

研究課題名（英文）Aspects of the Discourse on Women in Late 18th Century Britain: Utilitarian Feminism.

研究代表者
板井　広明（ITAI, Hiroaki）

専修大学・経済学部・准教授

研究者番号：６０４０５０３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、経済と生殖における再生産という観点から、夫婦のあるべき関係などについてのベンサムの議論を軸に据え、彼の功利主義から構想された経済社会に、いかにジェンダー的再生産の視点が組み込まれたのかということを検討した。
ベンサムの功利主義が各人の幸福の最大化のために、両性への平等な権利付与、女性を抑圧する社会の権力関係の改革、期限付きの婚姻制度を主張したのは、女性といった集団的属性を根拠にした差別的処遇が、社会の幸福最大化を齟齬ときたすからであり、とりわけ人類の半数をしめる女性らの境遇を改善することが重要であるという結論に至った次第を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果の学術的意義としては、往々にして多数者ルールを採用して少数者を抑圧する思想と捉えられる功利主義が、女性という、数では半数であるものの社会的に劣位に置かれてきた人々への権利擁護を真剣に考えていたということは功利主義イメージに変更を迫る意義があると思われる。また社会的意義については、昨今の同性婚や夫婦別姓の是非について、人々の幸福最大化という功利主義的観点から見た場合、期限付きの婚姻制度をはじめとして、諸個人の自由に任せるべき領域として、それら私的領域の決定を考えるということは意義があることと思われる。

研究成果の概要（英文）：This study examined how the perspective of gendered reproduction was incorporated into the economic society envisioned by Bentham's utilitarianism, focusing on Bentham's discussions about the proper relationships between couples, among other things, from the viewpoint of reproduction in both economics and procreation. Bentham's utilitarianism advocates for the equal granting of rights to both sexes, the reform of social power relations that oppress women, and a time-limited marriage system to maximize each individual's happiness. This is because discriminatory treatment based on collective attributes such as gender contradicts the maximization of societal happiness. The study particularly emphasized the importance of improving the conditions of women, who constitute half of humanity.

研究分野：社会経済思想史

キーワード：ベンサム　功利主義　フェミニズム

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

社会思想研究において、これまで（そして未だに）傍に追いやられてきた問題の一つはジェンダーの問題である。貧困や暴力、戦争を抑止し、人々の生命・身体・財産をいかに保障するかという近代における問いの根底にはジェンダー格差の問題があり、たとえば父子世帯と母子世帯を比較すると、賃金格差などで苦境に陥りやすいのは「女性」側であった。

そして、主に女性によって担われてきた、ジェンダー視点に立った社会思想の研究では 1970 年代以降の第 2 波フェミニズムが、M.ウルストンクラフト（1759-1797）に代表される 18 世紀末からのリベラル・フェミニズム（第 1 波フェミニズム）が公私二元論を前提していることや、不徹底な性別役割分業批判であったことなどを批判してきた。

しかしこの種の批判の多くは、当時入手可能だった文献資料が少なかったことや、運動論的なバイアスが強かった故に藁人形叩きになってしまった。現実に存在する男女の差別解消という実践的な問題関心に重点が置かれ、リベラル・フェミニズムが誕生したとされる 200 年ほど前のテクストは「読まれざるテクスト」であり続けた。

ウルストンクラフト没後 200 年シンポジウムなどを境に、徐々にリベラル・フェミニズムへの関心が欧米で高まったものの、なお検討されてこなかったのは、公私二元論や性別役割分業の批判を行ない、ウルストンクラフトに先んじて女性の権利を擁護していたベンサムらの功利主義者の議論だった。

近年、ベンサム、トンプソン、J.S.ミルなどを功利主義フェミニズムとして着目する研究が出始めている（Gardner, C. V., *Empowerment and Interconnectivity*, Penn State University Press, 2013.）。しかし、日本ではジェンダー史の専門家でも、この点での認識はまだまだ弱い現状である。そこで、本研究では未だ草稿段階にとどまることから十分に明らかになっていないベンサムの功利主義における女性の平等な処遇に関して、彼の家族論や結婚論を通してその内実を明らかにし、また同時代のゴドウィンなど功利主義を土台とした思想家の議論との比較の中から、その独自性を明らかにする。

もっとも、ベンサム研究においてもジェンダーの問題は存外、扱われてこなかった。研究書としては Boralevi, L.C. *Bentham and the Oppressed*, De Gruyter, 1984 や土屋恵一郎『ベンサムという男』青土社、1993 年くらいであり、近年、資料的制約がありながらも、Sokol, M, *Bentham, Law and Marriage*, Bloomsbury Academic, 2013.という重要な研究成果がようやく出てきた。

したがって、ベンサム研究においても、これまでに公刊されていない草稿を丹念に読み解き、ジェンダー視点からベンサムの功利主義の特徴を明らかにする課題は依然重要である。これはフーコーがベンサムの功利主義を管理社会の擁護論として批判したことに対して、どのような意味でベンサムはリベラルであったのかということを示す上でも重要であるというのは本研究の背景である。

２．研究の目的

本研究の目的はフェミニズムの思想史で適切に位置付けられてこなかった 18～19 世紀の功利主義フェミニズムの諸相を明らかにすることである（OED では feminism は 1895 年初出）。

フェミニズムが功利主義の思想を忌避してきた理由の一端は功利主義が人権論の枠組みをとらず、家父長制擁護の議論であると誤解されたことにあった。それゆえに、これまで功利主義フェミニズムは思想史的な位置付けが十分には行なわれてこなかったと言える。

ロンドン大学 UCL のベンサム・プロジェクトが編集した『新ベンサム全集』所収の *Of Sexual Irregularities, and Other Writings On Sexual Morality* (2013)が公刊され、徐々にベンサムの主張の概要が見えてきたものの、まだ埋もれているベンサム草稿が大量にあり、それらの中で、ベンサムが日々、どのような構想を練っていったのかを検討する必要がある。

関連する重要な先行研究としては、すでに言及した【Sokol 2013】があるものの、『新ベンサム全集』最新テクストや草稿で利用されていないものがある。そこで本研究では、従来不十分な形でしか明らかにされてこなかったベンサムにおける功利主義フェミニズムの内実を『新ベンサム全集』の最新テクストや未公刊の草稿を検討して明らかにし、19 世紀における多様なフェミニズムの展開に与えた功利主義の思想的インパクトおよびその広がりを明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

本研究では、まずベンサムの功利主義フェミニズムの特徴として、家族および夫婦に関する議論の全体像を明らかにする。公刊されたベンサムのテクスト（*Of Sexual Irregularities, and Other Writings On Sexual Morality*）および UCL 所蔵のベンサム草稿で結婚や家族に関する草稿が収められている Box lxx～lxxv を中心に検討する予定である。

研究期間全体で、ベンサムの家族論および結婚論の思想形成過程を明らかにする。ベンサムはたとえば 1790 年代には女性参政権を主張しながら、1830 年頃にはそれを取り下げており、時期によって主張が変容するため、夫婦や家族に関してリベラルな見解をもったのはいつからかな

どに留意して、ロンドン大学所蔵の草稿検討作業という海外調査を行なった。

４．研究成果

本研究の成果としては、従来の研究が看過していた功利主義哲学の論理とフェミニズム思想の関わりを明らかにするために、「最大多数の最大幸福」を標語に社会改革を構想したベンサムが、各人の幸福の最大化のために、両性への平等な権利付与、女性に抑圧的な社会に存在する権力関係の改革、期限付き結婚制度の確立を主張するに至った思想形成過程を明確にすることができた。

ベンサムは、快苦感受主体として男女を同等と捉え、自律的主体として夫婦は対等であるから、適切な関係構築のために期限付きの婚姻関係を採用すべしと斬新な提言をしているが、その主張には時期によって大きな違いがある。しかも、女性を政治的権利の主体ではないとする時期から、権利主体として位置付ける時期へと単線的に向かうのではなく、晩年にはまた政治的権利の主体から除外するという判断を下しているように複雑な経緯を示している。その意味では、功利性の原理をただ天下り的に現実に適用するのではなく、複雑な現実の諸相を見分け、妥協さえしつつ、望ましいあり方を模索していたのがベンサムの功利主義であった。

功利主義フェミニズムの研究において、その最も初期の功利主義者ベンサムの女性論・家族論が明らかになることは研究の進展にとって必須な作業であろう。今後の課題としては、ベンサムの家族論がブリテンを中心としつつ、同時代のフランスやイタリアなどのいかなる思想史的系譜から立ち現れたのかを明らかにしつつ、経済単位としての家族=世帯の位置付けを検討して、その経済秩序観を検討することである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Itai Hiroaki	４．巻 16
２．論文標題 Surveillance and Metaphor of "Tribunal" in Bentham’s Utilitarianism	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Revue d’?tudes benthamiennes	６．最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/etudes-benthamiennes.6132	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計2件

１．著者名 新村聡・田上孝一	４．発行年 2021年
２．出版社 社会評論社	５．総ページ数 392
３．書名 平等の哲学入門	

１．著者名 Susumu Egashira, Masanori Taishido, D. Wade Hands, Uskali Maeki	４．発行年 2021年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 322
３．書名 A Genealogy of Self-Interest in Economics	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会 A Workshop on the History of Ideas from French Perspectives: Family, Society, and Gender	開催年 2020年～2020年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関